

平成 21 年 5 月 22 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006 ～ 2008  
 課題番号：18592419  
 研究課題名（和文） 幼児・児童・生徒のふれあい・介護体験が認知症高齢者に与える影響に関する行動研究  
 研究課題名（英文） Behavioral research on influence that nursing care experience of young students give to elderly people with dementia.  
 研究代表者  
 今川 真治（IMAKAWA SHINJI）  
 広島大学・大学院教育学研究科・准教授  
 研究者番号：00211756

研究成果の概要：本研究は、幼児・児童・生徒および学生を受け入れているグループホームや高齢者福祉施設において、これら若年者との交流が、入居している認知症高齢者にどのような影響を与えているのかを、高齢者の行動を分析することによって検証することを目的とした。若年者の適度で穏やかな関わりかけは、認知症高齢者に肯定的な感情を惹起したと思われたが、認知症度が重度である場合には、交流に対する忌避的な行動が生じやすかった。

## 交付額

(金額単位：円)

|         | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2006 年度 | 1,000,000 | 0       | 1,000,000 |
| 2007 年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 2008 年度 | 700,000   | 210,000 | 910,000   |
| 年度      |           |         |           |
| 年度      |           |         |           |
| 総計      | 2,800,000 | 540,000 | 3,340,000 |

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域,老年看護学

キーワード：認知症高齢者, 行動分析, ふれあい体験, 若年者

## 1. 研究開始当初の背景

現代の我が国の、極めて切迫した問題である少子高齢社会における社会構成員の相互理解に向けて、幼児および児童・生徒、学生の介護体験や高齢者とのふれあい体験がとみに推奨されている。その位置づけと実践手法は、教育の現場によってさまざまであるが、それらに共通する理念は、超高齢社会と少子化という我が国の現状を理解させ、男女参画社会における子育てや高齢者の看護・介護といった課題に主体的に取り組ませることである。例えば中学校・高等学校の教育課程に

においては、「家庭」、「公民」、「保健体育」あるいは「総合的な学習の時間」の中で、学校近隣のグループホームや高齢者福祉施設などへの訪問と体験が推奨され、一部の学校においては実際にそれが行われている。また、大学の教職課程における「介護等体験」は、中学校教育職員免許状を取得するための必修科目と位置づけられているため、多くの大学生が単位取得を目指しており、種々の体験施設の一つとして、やはりグループホームや特別養護老人ホームなどが、それらの学生の受け入れを実施している。

このような背景の中で、これまで顧みられ

ることが少なかったのが、受け入れ側のホームや施設に入居している高齢者、特に認知症高齢者に対して、これらのような幼児・児童・生徒・学生の訪問が、どのような影響を与えているのかについての検証である。

多くの施設では、それらの学生の受け入れをボランティアとして行っているが、施設の側は、若い世代の人々との交流が、高齢者にとって生活の喜びや生き甲斐につながると、ほぼ無条件にその効果を信奉している嫌いがある。しかし、認知症高齢者の中には、他者との密な交流を忌避し、時には防衛的な規制によって他者に攻撃的な態度を示す場合もあるし、初対面の他者に対して回避的になったり、寡黙になってしまう場合もあり得るのである。

このような現状と背景の元で、多くの他者に対して門戸を開くことになる、最近のこのようなボランティア学生の受け入れが、実際の介護の現場で、認知症高齢者自身にどのような影響を与える可能性があるのかを知ることは、今後の高齢者介護にとってのみならず、看護・介護体験の実施に伴う効果やリスクを検証する上で極めて重要な視点である。

介護体験を、教育効果や教育実践との関連において検証することを試みた研究は散見できる(岡野, 1999; 北川, 2002; 戸原 他, 2002; 奥 他, 2005)。また、そのようなふれあい体験が幼児に与える効果については、徐々に研究の蓄積が行われるようになってきている(例えば關戸, 2002 など)。さらに、例えば高齢者を介護することによる成人のアイデンティティの発達を、実証的に検証した研究などもある(岡本, 1997)。しかし、本研究のような視点から、若年者層の看護・介護等体験を検証した研究は過去に例を見ない。看護・介護等体験を受け入れる側の、特に認知症高齢者の目を通した、そのような事象についての視点は全く欠如していたといわざるを得ないのである。そのような意味で、本研究は極めて独創的であり、看護・介護体験の効果およびリスクを再確認することができるとともに、当該分野における知見を深め、重要な示唆を与えるものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、幼児・児童・生徒および学生を受け入れているグループホームや高齢者福祉施設において、これら若年者との交流が、入居している高齢者、特に認知症高齢者にどのような影響を与えうるのかを、高齢者の行動を分析することによって検証することを目的とする。筆者のこれまでの研究によって、このような場面では、過剰な刺激を忌避する高齢者の否定的な反応が観察されることが

ある一方で、高齢者の一部には笑顔や積極的な発話などの肯定的感情が喚起されるなど、若年者との交流の、高齢者に対する肯定的な方向への影響も期待される。若年者の訪問が、実際の介護の現場で、認知症高齢者自身にどのような影響を与える可能性があるのかを知ることは、今後の高齢者介護にとってのみならず、看護・介護体験の実施に伴う効果やリスクを検証する上で極めて重要であると考えられる。

## 3. 研究の方法

### (1) 文献検討

まず、本研究に関連する先行研究や文献の調査を行う。本邦における先行研究がほとんど存在しないことは、申請時において既に調査できているが、欧米諸国やアジア各国における同様な研究の有無については更なる検証が必要であり、これを行う必要がある。さらに、幼児から大学生に至るまでの広範な年齢層における体験実習の成果に関する文献にも更に広くあたり、本研究の位置づけを確固としたものにする。

### (2) 実態調査

研究機関所在地を中心とした地域における、幼稚園、保育園、小・中・高等学校におけるふれあい体験学習の実態を調査する。また同時に、グループホームや高齢者福祉施設の、看護・介護実習やふれあい体験などの受け入れ状況を調査する。

これらの予備的調査に当たっては、デジタルカメラを用いて各施設の状況や入居者の情報などを適宜記録し、撮影した写真をプリントして渡すなどして、対象者や施設に還元することによって研究協力に対するより深い信頼を得るよう努力する。

### (3) ビデオを用いた認知症高齢者の行動データの収集と解析

本研究の開始時まで、長期にわたり研究の協力を得ている長崎県島原市にあるグループホームにおいて、近隣の小学校、中学校、高等学校からの介護・ふれあい体験の日程に合わせて現地での調査観察を行い、対象とする認知症高齢者の行動解析を行う。

データ収集に当たっては、デジタルビデオカメラを用いることとし、施設職員の協力を得ながら複数のカメラを同時に用いることで、対象者と、対象者に関わる体験者の相互交渉を同時的に、複数のアングルから記録することの可能性を検討する。

データの解析には、比較行動学的分析手法を援用し、ワンゼロ法および点観察法の併用によって対象者の表情と身体行動による感

情状態の定量化を行う。さらには、Fleming, R. (1999) の開発による ERIC(感情反応評価尺度)を用いて、行動指標との適合性を検証することを試みる。

研究にあたっては、倫理的側面に十分配慮し、対象者から研究に対する協力の同意を得るようにする。認知症高齢者自身が研究に対する協力に同意できない場合には、家族からの同意を得る。また、対象者個人のプライバシーに抵触するような場面のビデオ撮影は、これを行わない。研究の実施に当たっては、対象者の生活リズムを壊さないような配慮を行い、さらに、観察中の事故などが起こらないよう安全面には十分な注意を行う。対象者本人、家族、対象施設などから研究中止の要請や意思表示があった場合には、途中であっても研究を中止する。本研究において収集したビデオ映像は、その行動内容をワンゼロ法および点観察法によりデータ化するため、個人のプライベートな情報や映像そのものを公表することはないものとする。

#### 4. 研究成果

本研究の目的にも述べたように、まず本研究に関連する先行研究や文献を検索し蓄積することを試みたが、本邦に限らず、世界的に見ても当該分野に関係する先行研究はほとんど存在しないことが明らかとなった。さらに、幼児から大学生に至るまでの広範な年齢層における体験実習の成果に関する文献の収集も試みたが、この分野でも先行研究はほとんど存在せず、この分野そのものが、データの集積が危急的に必要な分野であることが明確となった。

次に、東広島市内にある幼稚園・保育園・小・中学校を対象に、ふれあい体験学習の実態についてのアンケート調査を実施した。

その結果、幼稚園と保育園については、園児が高齢者とふれあう機会を持っている園が多く存在し、全園の半数近くに上った。それらの園の幼児たちが交流する高齢者とのふれあいの場は老人ホーム、デイケアセンター、地域の老人会・老人クラブなどであり、その多くは園児が高齢者施設などを訪問する形で実施されていた。ふれあいの内容は、園児が高齢者に歌や踊りを披露するものから、高齢者側が園児たちに歌や踊りを披露したり、遊びや工作などの技能を教えるものなどが挙げられた。

このような体験を実施している園の回答者のうち多くは、このようなふれあいの体験が、幼児と高齢者双方にとってよい影響を持つことを期待していた。しかし、実際の効果については、そのような体験は、どちらかというと園児のためにはよりよいが、高齢者に

とっての効果は不明であると回答した。このことから、高齢者側からの検証をさらに進める必要があると考えられた。

また個別の事例として、東広島市内にあるM幼稚園では、園の行事の一環として、地域の高齢者を定期的に園に招いてお茶の会を催すなど、常日頃から高齢者と幼児たちとのふれあいの機会を設けていた。そして、そのようなふれあいは、園児にとっても高齢者にとってもよい機会だと考えており、高齢者たちにとっても大きな楽しみとなっていることが確かめられた。

他方、ふれあいの機会を持たない園の回答者のほとんどは、幼児が高齢者とふれあいの機会を持つことは必要と感じるが、まわりに適当な高齢者施設がないと回答し、しかしながら将来的には、高齢者とのふれあいの機会を持つようにしたいと回答した。

小学校と中学校については、アンケートの十分な回収ができなかったため、量的な分析は困難であるが、回答が得られた学校のうち、ふれあい体験学習を実施しているものは極めて少ないという結果であった。その主たる理由も、近隣に適当な施設がないことであった。超高齢社会における高齢者との関係を適切に形成するためには、児童や生徒が高齢者とふれ合う機会を準備することが必要であるが、現状では、受入側の高齢者施設の体制の問題もあり、大きな困難を含んでいると言わざるを得ない。

認知症高齢者の行動分析は、島原市のグループホームにおいて得られた、中学生とのふれあい時のビデオデータによって行った。観察日に体験に訪れた中学生は6名であり、近隣の公立中学校の2年生であった。また、引率の教師が1名同行していた。

体験に訪れた中学生は、最初のうちは不慣れで緊張が高かったと思われ、高齢者に声をかけられなかったり、対象者との距離を上手に縮められない、身体接触(タッチケア)を始められないなどの、ふれあい行動の停滞や発話量の減少などが認められた。しかし、15分後くらいからは、高齢者に対する積極的な関与が見られるようになった。若年者からの関わりかけに対して、入居する9名の認知症高齢者のうち、3名の高齢者(いずれも重度認知症)に、ふれあい体験に訪れた中学生に対する人見知り に似た回避的行動が観察された。人見知りに似た行動として出現した行動は、表情の停止(表情がこわばる、表情筋の動きが止まるなど)、運動量の減少(徘徊の停止、椅子から立ち上がらなくなるなど)、若年者の接近に対する回避的な移動であった。他の6名の高齢者には、若年者に対する上記のような否定的な行動は認められなかった。中等度以下の症状の高齢者にはすべて、接近したり声をかけてくる若年者に対する

応答的発話や笑顔が発現した。また、若年者からの身体接触（タッチケア）に対してもこれを拒絶するような反応は認められなかった。これらの高齢者は、若年者からの、手遊びや風船バレーなどの運動への誘いにも積極的に参加し、穏やかな表情や、楽しそうな表情が多く出現した。しかし、若年者が過度に大きな声を上げて笑ったり、過度な身体接触を行うなどしたときには、高齢者に若干の回避的姿勢や忌避的反応（顔をしかめる、顔をそむけるなど）が見られた。

認知症高齢者の若年者に対する応答行動は、認知症の重症度と関連があるように思われ、認知症度が重度であるほど、新規に会う他者への行動に堅さや緊張した様子が出現する傾向があるように思われた。しかし、全体としては、適正な人数で、適度な内容を持った若年者との交流は、認知症高齢者にとっては良好な社会的な刺激となっていると思われた。ただし、今回の体験者は中学生のみであり、より活動性が高いと考えられる園児や小学生の場合には、異なる反応行動が出現することが十分に予想され、対象者を代えた更なる検証が必要とされることである。

以上述べてきたように、本研究に関連するような先行研究や文献はほとんど存在せず、当該分野におけるデータの集積が急務であるが、下記のような理由で、その実施には大きな困難が伴うと考えられる。

まず、多くの高齢者施設において、入所者の安全やプライバシーの保護上の問題などによって、児童や生徒の体験学習の受入を躊躇していることが挙げられる。また施設側からは、高齢者にとって、若年者との交流が、本当に良い効果を及ぼすものであるか否かについての懸念も聞かれる。さらには、高齢者施設が種々の理由によって市街地等から隔離されたアクセスの困難な地域に偏在していることもある。幼稚園などにおいては、高齢者とのふれあいを実践している園があり、園児と高齢者の双方に良い効果を与えていると認知される傾向がある。しかし、小・中学校や高等学校においては、主として家庭科や総合的な学習の時間等の分野において、高齢者とのふれあいを通じての高齢社会に対する理解の必要性を教示している一方で、実習時限確保の困難さや実習先施設との関係形成の困難さなどにより、その実施そのものができていない状況にあることが明らかとなった。

最終的には本研究の行動分析結果が示すように、園児や児童、生徒、学生などの若年者との交流が、高齢者の意識や行動を肯定的な方向に変化させ得ることを、さらに実証することが必要である。それによって、実習を希望する園や学校の幼児や生徒・学生が高齢者とのふれあいを体験でき、同時に若年者と

の交流を希望する高齢者施設の入所者の生活満足度の向上に貢献できるものと期待する。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 0 件）

〔その他〕

講演会・シンポジウム

講演会タイトル「尊厳ある暮らしを支える」

日時：平成20年7月19日

場所：島原復興アリーナ

演題：認知症高齢者の屋内徘徊行動と職員の対応との関係

シンポジウムタイトル「認知症高齢者が安心して！自分らしく！暮らしていくために！」

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

今川 真治 (IMAKAWA SHINJI)

広島大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：00211756

### (2) 研究分担者

### (3) 連携研究者